連載

セキュリティ指南書
不正防止の虎の巻

第9回

前回、「衝撃のゴト師新ネタ発表会」について斬らしてもらった。信じられない話だが、闇の世界では当たり前の様に行われている。

前回、「親」「子」「パッカン」なる言葉を使ったが、「どういう意味ですか?」と言う問い合わせが何件か有った。今回はまずその説明をしておこう。「斬、耕平が斬る!」

株式会社A・P総研
代表取締役
中野耕平
kouhei nakano

「親」とは…

＊参照：コラム第七回

ピアノ線にしてもセルにしても、それをそのまま差し込む事は非常に困難である。その為に、まずは侵入経路を確保する必要が有る。それが「親」と呼ばれる〝ゲタ〟だ。

弊社の講演会でゴト道具展示ブースに立ち寄られた方ならお分かりだろうが、この「親」は、相当に手の込んだ形に削られたり曲げられている。

どこに差し込むのか、どう差し込めば「子」を狙う箇所に誘導できるのか、相当に研究した事は容易に想像できる。

その形は分厚いプラスチックと言うか、成型されたプラスチックの様なものを削るだけでなく、中に溝を作ったり、後ろには裏の盤面を押す為の突起が出ていたり、とにかく想像を絶する形になっている。「良くここまで仕上げたものだ」と感心してしまう程だ。

「子」とは…

いわゆるピアノ線やセルの事である。「親」がピアノ線等を誘導する役目ならば、「子」は誘導され、目的を果たす為の道具だ。

「子」の形も「親」にも勝るとも劣らないほど複雑怪奇な形をしている。それでもコピることは出来る。故に「子」の値段そのものは、コピられ辛い「親」よりも安くなる。

まあ通常セットで売っているので、どっちの値段がどうかは問題ではない。現場では実行犯が実行後に持ち去る。

これにはいくつかのメリットが隠されている。

①打ち子が裏切りを企んでも「親」を持っていないので裏切る事が出来ない。

②もし打ち子が捕まっても「親」を持っていない為、立件出来ず無罪になる事が多い。

「親」を持っているのがチームリーダーで、何人もの打ち子を抱えていると言う図式が、一般的だ。

ちなみに、「金属製のセル」と言う人がいるが、それは間違っている。セルは、セル板を加工して作っているから〝セル〟であって、金属を加工したものは「リボン」と呼ばれている。せっかくこのコラムを読まれているのだから、もし、どこかの講演で「金属製のセルを使ったゴトが・・」等と知ったか振りをしている講師がいたなら、「それってリボンの事ですよね」と言ってやろう。

「パッカン」とは…

この言葉を初めて聞かれた方も多いだろう。前回は紙面の都合上説明しきれなかったが、過去の事例を参照に、しっかりと教えておきたい。

「パッカン」を全国で初めて発見したのは、警察でも警備会社でもなく、何を隠そう〝私〟だ。当然発見するまで〝それ〟を見た事が無かった。ただ、どこかでそれらしき物があると言う情報が、頭の片隅に残っていた程度だった。

ある時、とあるホール様から、異常な出方が続いているので検査してもらえませんか、と相談が有った。内容からして相当な数の裏ロムが仕込まれている事は想像に難くない。

関東のはずれのホールへ向かったのは、夏も終わり頃だったろうか。

検査開始…

さて検査を始めると予想を超える裏ロムが、次から次へと出てくるではないか。もちろん、これだけの仕込みともなると営業中に出来るはずも無く、経営者サイドでは内部犯行を疑った。

だが私は、犯人は外部者だと睨んだ。どこかに盲点が有るはずだとビデオを確認した。幸いに、三週間ほど前に変な輩が来た時のビデオを残してくれていた。

ビデオを観る。そこには茶髪にヒョウ柄シャツをきた男、安キャバで働いていそうな派手な女が映っていた。店側は入店時から怪しいと思い、必死にカメラをパーンさせつつ輩達の動きを見張った。それらしき輩は合計で七名だった。

インカムで伝え聞いている店員も、輩達に気付かれまいとしつつも状況を事務所に伝えた。結果、店では自分たちが警戒している事に気付いた輩達が、何もせず退店したと安心していたのだった。

確かに終わりまで観ても、その様に思えた。しかし、終わり間際に映っていた映像に私は強い違和感を覚えた。

「すみません、先ほどのところまで巻き戻してください」

突然の私の指示に、どこまで巻き戻して良いか分からない店長に、ビデオデッキの操作を聞き自分で巻き戻した。

親分発見!…

「こいつが親分です!」

私の興奮した声で一気に緊張が走った。

「何が映っているんですか?」

「ここです、この太った奴です!」

そこには、今まで全く映っていなかった関取の様に太った男が、通路の長椅子に腰掛けているのが映し出されていた。この親分は店側がノーマークだった為、最後まで映されていなかった。たまたま固定された一つのカメラの遠目に映っていたのだった。

「皆さん、良〜く観てください。この男の横に痩せた男が座ります」

確かに今まで映っていなかった痩せ男が、何気なく親分の横に座った。それだけなら、何でも無いただの遊技客が、休憩にちょっと座っただけとしか思えない光景だ。

「ここです、この時です!」

ひと際大きな声を出した私の声に、皆がさらに画面に目を凝らした。

「今、痩せ男が何かを親分に渡したのが見えたでしょ!!」

「あ!確かに何か渡しました」

「一瞬ですが金属のようなものを渡し、すぐに背広の奥に隠しました!」

皆が奇声を出して驚いた。

「もしかして…」

私は大急ぎで事務所を出た。何事が有ったのだろうと驚いている店長達も必死に私について来る。しかし天上ばかり見ている私を訝（いぶか）しげにしているだけだった。その時だ!!

「あった、有りました!」

みんな驚きながら私が指を指している天井を見た。そこにはセキュリティセンサーが有るだけだ。

「すぐに脚立を持ってきてください」

脚立を上ると、焦る気持ちを抑えつつセンサーに手をかけた。そして、ある物を外した。店長達は私がセンサーをもぎ取ったのかと一瞬思ったと言う。しかし、センサーはセンサーで天井に付いたままだった。

だが私の手にはセンサーの様なものが。

「せっ先生、それは一体・・?」

「これですか、これがパッカンです」興奮を必死に抑えたが、声は少々上擦（うわず）っていた。

さて紙面が尽きてしまった。この続きは次回にて〝斬らし〟て頂こう。

illustration：t.tsukamoto

なかの こうへい
1957年高知県出身。大手OA機器販売メーカー・大手建設会社などでの勤務経験の後、パチンコ業界に入る。その後、三十年以上にわたり、パチンコ業界の全てを研究しつくし、各遊技業協同組合でも不正防止講演会に講師として参加するなど、不正防止の知識を広く伝えるべく活動を行っている。

A-P GROUP
記事に関するお問い合わせはA・P総研まで　Tel.03-3202-0971